

平成25年3月20日

みんなのBOUSAI!! in 神戸～広がる共助の輪・ミーティング～

実施概要

主催：内閣府

後援：兵庫県・神戸市

日時 平成25年1月27日（日）11：00～16：30

場所 兵庫県立美術館ミュージアムホール

フォーラム開催にあたって

ボランティア元年と呼ばれ、「共助」による防災活動の原点となった阪神淡路大震災から18年。神戸で芽生えた取組が進化し、東日本大震災等を経て、改めて住民やボランティア等による「共助」の防災活動が注目されています。この機会を通じ、住民による自主防災組織から学生や企業による被災地支援活動まで、多様な主体による先進的な取組について、その課題や今後の方向性を考えます。

プログラム

11：00- 開会・挨拶

11：15- 基調講演

『防災とボランティアと共助の現状、そして今後への期待』

室崎 益輝（関西学院大学総合政策学部教授・ひょうごボランティアプラザ所長）

13：00- パネルディスカッション・参加者との意見交換

『みんなで語る、多様な共助の広がり』

○司会

鍵屋 一（特定非営利活動法人東京いのちのポータルサイト 副理事長、板橋区福祉部長）

桜井 政成（立命館大学 政策科学部 准教授）

○パネリスト（五十音順）

青木 杏奈（KOBE 足湯隊 リーダー）

西條 剛央（ふんばろう東日本支援プロジェクト代表、早稲田大学専任講師）

長沢 恵美子（一般社団法人 経団連事業サービス 総合企画・事業支援室長）

松田 曜子（特定非営利活動法人レスキューストックヤード 理事、関西学院大学災害復興制度研究所 特任准教授）

南 嘉邦（旧居留地連絡協議会防災・防犯委員長）

16：30 閉会

防災とボランティアと共助の現状 そして今後への期待

ひょうごボランタリープラザ
室崎益輝

1

災害ボランティアの歴史

2

日本における災害ボランティアの展開

▶ 災害ボランティアの歴史

関東大震災や福井地震など、古くから赤十字、宗教団体、労働組合、大学などによる災害ボランティアは、大災害時には必ずと言ってよい程に、活躍してきた

今日のように、一般の市民が率先的に被災者の救援を行うようになったのは、伊勢湾台風以降である

- (1) 伊勢湾台風以降・・・胎動期
- (2) 普賢岳噴火以降・・・発芽期
- (3) 阪神淡路大震災以降・・・成長期
- (4) 新潟中越地震以降・・・成熟期
- (5) 東日本大震災以降・・・転換期

▶ 3

災害ボランティアへのニーズの高まり

▶ 阪神・淡路大震災以降、災害ボランティアの必要性が高まっている・・・その背景として、次の4つが考えられる

(1) 災害の巨大化

巨大災害には減災で対応する。減災では人間の足し算が欠かせない。自助や公助だけではなく共助が必要。

(2) 地域コミュニティの弱体化

高齢化や過疎化あるいは都市化などによってコミュニティが衰退し、従来のような互助が期待できない

▶ 4

災害ボランティアへのニーズの高まり

(3) 行政サービスの縮小化

行財政の改革などにより小さい政府が目指され、その結果として行政に依存できなくなっている・・・市民が担うべき公共領域が増えてくる

行政はマスケアができて個別具体的な細やかなケアはできない

(4) 新しい市民社会の形成

市民活動の高揚や中間組織の台頭の中で、市民相互の助け合いと支え合いによる社会が成熟しつつある・・・地縁と知縁が融合する社会の形成

阪神・淡路大震災からの取り組み

「阪神・淡路」・・・ボランティア元年

- ▶ 2ヶ月で100万人を超えるボランティア(1日、2~3万人)が被災地に駆け付けた・・・「ボランティア元年」と言われた
 - (1)春休みであったこともあって、中高生を含む大量の若者が被災地に駆け付けた 大阪などの学生の中では、ボランティアに行くことが、一種の流行現象にもなった
 - (2)ボランティアの「定型」や「規範」がなかったので、「自由な発想」による活動が多方面で展開された、が・・・
 - 一方では、未経験ゆえの様々な混乱が
 - 行政の窓口の大混乱 仕事を見いだせず失意のまま帰るボランティア 自己完結ができない「迷惑ボランティア？」

▶ 7

ボランティアの態勢の整備

- ▶ 阪神・淡路大震災の経験を踏まえ、災害ボランティア態勢の整備と充実がはかられた
 - 福井重油流出ボランティア活動などの反省を踏まえて
 - (1)災害ボランティアセンターの体制
 - 社協その他による体制づくり
 - (2)ボランティアコーディネーターの養成
 - 災害ボランティアコーディネーター養成講座など
 - (3)災害ボランティア組織の恒常化
 - 震つな、NVNAD、東災ボ、支援P、災害ボラ検討会など
 - (4)災害ボランティアの規範の醸成
 - 安全衛生マニュアルなど

▶ 8

ボランティア規範の形成

- ▶ ボランティアに求められる心・技・体
 - 心・・・被災者に寄り添うという視点
もし自分が被災者であったらどうしてほしいか
 - 技・・・ボランティアとしての高い能力
信頼関係を築く力、被災者に寄り添う力、被災者のニーズに応える力
→寄り添う支援、引き出す支援、分かち合う支援
 - 体・・・連携し協働する態勢づくり
- ▶ ボランティアに求められる四つの要件
自己完結、自己管理、自己組織、自己実現
ただし、杓子定規に考えない

▶ 9

東日本大震災とボランティア

未曾有の大災害とボランティア

- ▶ 前例のない災害とそれによる被災者の苦悩は、無数のそして多様なボランティアを必要とした

(1) 甚大でかつ広域な被害

避難者45万人、避難所2500ヶ所、圏外避難10万以上

→広範かつ大量の支援がいる(大量性)

(2) 生活と生業の複合的被災

住宅も仕事も土地もすべてを失う

→多様かつ長期の支援がいる(持続性)

(3) 公的機関の深刻な被災

被災自治体200以上、死亡した自治体職員350人以上

→公的かつ専門の支援がいる(専門性)

東日本大震災でのボランティアの進化

- ▶ 阪神・淡路から大きく前進した

ボランティア元年からネットワーク元年へ

少なくとも延べ300万人のボランティア

・ ・ ・それでも全く足りない(ボランティア側の視点ではなく被災者の視点で見る)

(1) NPO、社協、地域コミュニティ、企業の連携

協働の正四面体、国際ボランティアや企業ボランティアの参画、大学と地域の連携も

(2) 広範なボランティアの重層的ネットワークの形成

JCN、連携復興センター、ボランティア連絡協議会、..

(3) 後方支援や中継支援の拠点の構築

遠野まごころネット、東日本ボランティアインフォメーションセンター、ボランティアプラットホーム、..

東日本大震災でのボランティアの進化

(4) 世代と活動の幅の広がり

団塊の世代から中高校生まで

専門的ボランティアの広がり

・・建築家、弁護士、看護師など

(5) 支援側と受援側の連携

県外被災者支援のネットワーク

受援者・支援者連絡会議

(6) 被災地と被災地の連携

(7) 一過性の支援から継続性の支援へ

暮らしと経済の支援、まちづくりの支援

(8) 寄り添う支援や引き出す支援の進展

「御用聞きボラ」から「足湯隊」へ

その他にもいろいろ、全体として「形」が先行しているが、・・・

これからのボランティアの課題

問われた課題の克服

- ▶ 災害ボランティアの原点を見直す
 - 「技・体」の前に「心」
 - 被災者に寄り添う気持ちを忘れず
- ▶ 問われた課題の克服をはかる
 - (1) 行政に依存しない
 - 被災者の自立と共にボランティアの自立
 - (2) 志は高く敷居は低く
 - 「経験主義」「権威主義」に陥らないように
 - 被災者と先進事例に学ぶ謙虚さ
 - (3) 共創のプロセスを大切に
 - 一過性のイベントだけでなく

共創・協働社会の構築

- ▶ ボランティアは、自助、公助、互助、共助の正しい関係を踏まえた、減災と協働の連携システムの一翼を担う
 - (1) 協働の正四面体
 - 行政、コミュニティ、企業、ボランティアの四者が
 - 対等の関係でスクラムを組む
 - コミュニティケアとボランティアケアの融合
 - (2) 協働のネットワーク
 - 多様なボランティアや職能集団がそれぞれの得意技を持ち
 - 寄ってつながる・・国際系など多様なNPO相互の連携も・・人手の足し算から知恵や技能の足し算に
 - お互いの「支援文化の違い」を認め合う、しかし被災者に寄り添う原点や連帯するという視点は崩さず

パネルディスカッション『みんなで語る、多様な共助の広がり』

キーワード紹介

【パネリストからの話題提供／キーワード】

○西條さん

- ・リミッター（できるかぎりのことをやろう）／ツイッター（SNS 革命）
- ・新しい「方法」で（積極的にチャレンジ）

○青木さん

- ・カエル／ほっとする存在
- ・よそ者、若者のチカラ（楽しさ、ワクワク感）

○長沢さん

- ・東日本大震災は、寄付元年／CSR のあり方が問われた（先義後利）
- ・企業文化を「予習」で変える

○松田さん

- ・国土柔軟化計画
- ・やわからかなつながり、生きづらさを感じず、排除されない社会づくり

○南さん

- ・まちの魅力
- ・全体最適と部分最適の一致（企業コミュニティのチカラ）

【パネルディスカッション／キーワード】

○「公助と共助」

- ・東日本大震災で、公助と共助の役割分担がきちんと線引きがされなくなった
- ・今までの平準化のやり方でいいのかあらためて考える必要がある
- ・本来、行政がやるべき役割が民間に振られて、民間が果たすべき丁寧な役割が果たせなくなる
- ・それぞれの自助だけではなく、地域や企業など、いろいろな団体が連携して共助を進めていく

○「悩み相談」

- ・ささいなことでもいいので、取りあえず打ち明けることが最初のステップ
- ・ボランティア活動への参加が、同じ悩みを共有したり、同じ立場にいる人たち同士が会おう場

○『つながる』ための7か条

- 1 相互理解の姿勢を持つ。
- 2 共通体験を通して、Win-Win の関係をつくる。
- 3 受援力を高める弱みを出す飲みにケーションをする。
- 4 普段のお付き合いを通して、巻き込み巻き込まれ、人を貯える。
- 5 課題を真ん中に置き、成果のわかりやすさと検証する視点を忘れない。
- 6 協働コーディネーター役を欠かさない。

7 組織としての限界を設定せずにあきらめずに突破口を開く。

そしてすべては「したたかに」。

・災害は日常の延長線上にあり！

○「感謝」

- ・組織をうまく回していく上でも本当に大事なこと
- ・シンプルな気持ちは、組織の運営やボランティアを行う上では欠かせない

○「点の支援を増やす」

- ・大きなことはできないけれど、ずっと寄り添っている団体が増えればの声を多く拾える
- ・点もたくさん集めれば線になり、面になる

○「NPO のチカラ」

- ・働ける NPO をもっと増やしていく、学生の就職先に NPO という選択肢がもっと増えるとよい
- ・きちんと自分たちも幸せに生きることを担保する道筋、技術を身に付けることも大事

○「企業との連携」

- ・ボラバスのような形で企業横断的な取り組みを地域の中でつくる
- ・仲間や地域、自治体などいろいろなものを巻き込みながら進めていく

○「コミュニティ」

- ・全国に散らばっていてもよい、場所にこだわる必要はない
- ・一方で、場所に結び付いた地域コミュニティをもっと大切にする
- ・コミュニティリーダーという接着剤のような存在が必要
- ・NPO、学校や企業との連携のつくり方など、新しい社会システムの中で弱さをサポートし、コミュニティとしてきちんと機能するような社会をつくっていくこと
- ・地域でいかに異なったタイプの組織がつながることが、地域の支援力を高めていく上では必要
- ・雨ニモマケズ 風ニモマケズ・・・あまり役に立っていない人がいることで場が和んだり問題が解決する場合もある
- ・やわらかなつながりによる支援、やわらかいつながりの強さが新しい文化として芽生えはじめてきている

○「公」

- ・みんなが少しずつ「公」の気持ちを持つというのがあるべき姿
- ・自分一人で勝つわけにはいかない、運営共同体

○地域愛

- ・様々な人たちがつながり合うことで輪がどんどん広がり、その輪が強くなり、ボランティア文化、共助文化という新しい日本社会の大きな力が育っていく

○受援と支援

- ・それぞれの地域コミュニティ、地域社会の中で、助けられることに対する文化を育む
- ・自分の得意技は一体何かを考え、お互いに自立、連携して責任を果たすこと